テーマ　リスクアセスメント定着活動の推進

（KITO　安全ボックス・ビジョンの推進）

『トップ自らによる安全衛生の改善活動事例』
”安心して作業ができる職場環境づくり”

【活動内容】「トップのリスクアセスメント活動」の盛込み
【キーワード】　①人づくり　②職場環境づくり　③風土づくり
（キーワードに〇印；複数可）

（平成22年1月16日）

会社名	鬼頭工業株式会社			
	トップ		推進責任者	
役職名	専務取締役	㊞	WSE事業部長	㊞
氏　名	鬼頭　敬		内藤英博	

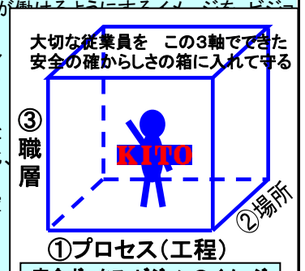
1. 取り上げた背景

2008年まで客先工事で実施してきたリスクアセスメントを、**工事作業現場だけでなく　受注から据付までの全プロセス（作業工程）**をカバーする　安全作業・職場づくりを目指し取り組んできた。
そのリスクアセスメントでの気付きとして、会社の安全風土づくりにおいて　継続的な「人づくり」「職場環境づくり」なくして「安全風土づくり」や自立的な進化は成しえない　と再認識し、KITOトップとして**『安全ボックス・ビジョン』**を構想した。

『安全ボックス・ビジョン』とは？

受注から設計・製作・据付・調整までの①**「プロセス（作業工程）軸」**と、②作業等が行われる自社工場・事務所・客先工事現場等での②**「場所軸」**に加えて、各シーンにおけるトップ層から作業員までの役割③**「職層軸」**の**3軸の柱で”安全の確からしさ”箱（＝安全ﾎﾞｯｸｽ）**の中で社員が働けるようにするイメージを　ビジョン化・しくみ化

その3軸での安全度レベルアップ（箱の中の酸素濃度を上げるかのように**”安全濃度”を上げる）活動**を　会社として継続的に評価、見える化、進化させ、風土化する活動。
リスクアセスメントはその確からしさを事前・定量的に評価するために不可欠な活動手段。



安全ボックス・ビジョンのイメージ

2. トップの職場巡視の計画と実施状況

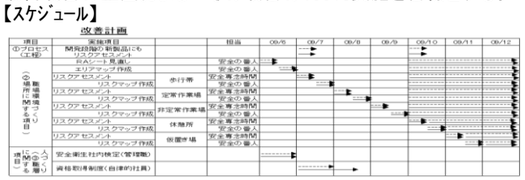
09年 1～12月の客先工事等でトップ層（会長、副会長、専務、部長　計7名）により、延べ147回の職場巡視を計画し（土日連休等の工事中）155回実施。　また　それに加えて　”事前”安全点検と称し工事前日（金曜日等の工事前）にも　毎週トップ自

3. 本年度の課題　（現状の問題点）

自社なりに①工程軸のリスクアセスメント活動ベースは出来つつあるが、リスクアセスメント実施後の「残留リスクの見える化」作業などに対しても　もっと現場が自分の現場のリスクを「継続的・自立的」に網羅する活動の弱さがまだまだ残っていた。（特に②場所軸③職層軸においての課題。　）
また　作業のﾘｽｸｱｾｽﾒﾝﾄに活動が集中しがちで　例えば工場内の歩行帯や、作業場以外での休憩場所など、ややもすると　リスクアセスメントの必要性が見落とされがちな分野が　同様に　課題となっていた。（特に②場所軸③職層軸においての課題。　）

4. 重点目標とスケジュール

【重点目標】 既存の①プロセス軸の活動に加え、②場所軸・③職層軸の活動を重点化。それぞれの教育・リスクアセスメント等への改善項目の企画および　その項目の100%実施を目標とする。
【ｽｹｼﾞｭｰﾙ】


改善計画

項目	実施項目		担当	06/6	06/7	06/8	06/9	06/10	06/11	06/12
①プロセス（工程）	開発段階の新製品にもリスクアセスメント		安全の番人							
	RA（ｰﾄ見直）		安全の番人							
②場所に関連する項目	エリアマップ作成		安全衛生委員会							
	リスクアセスメント	歩行帯	安全の番人							
	リスクマップ作成		安全衛生委員会							
	リスクアセスメント	定常作業場	安全の番人							
	リスクマップ作成		安全衛生委員会							
	リスクアセスメント	非定常作業場	安全の番人							
	リスクマップ作成		安全衛生委員会							
	リスクアセスメント	休憩所	安全の番人							
	リスクマップ作成		安全衛生委員会							
	リスクアセスメント	仮置き場	安全の番人							
	リスクマップ作成		安全の番人							
③職層に関する項目	安全衛生ｾﾐﾅｰ検定（管理職）									
	資格取得制度（自律的社員）									

【別添資料　1-1】「改善計画」参照。

5. 実 施 状 況

1. プロセスという軸（開発から据付までの全作業工程）でリスクアセスメントしていく活動。（例）

1-1.（受注以前の）SE・開発検討中の設備や　営業が受注活動中の段階から、リスクアセスメントができるしくみを実施。　昨年度からの活動進化としては　デジタルデータ上で実際の作業を電話帳の一行一行と連動させた作業シミュレーションをする等、グローバル展開に必要不可欠な**現地での設備据付のシンプル化とﾘｽｸｱｾｽﾒﾝﾄをSE開発段階から具体的に融合**させ”安全”と”ｼﾝﾌﾟﾙ化”のための大幅な設備構造改善を実施。その　SE開発段階でのﾘｽｸｱｾｽﾒﾝﾄならではの活動を　SE開発プロセスでの安全の番人の役割とした。（組立生技様との新ライン開発事例より。）

本年度の重点進化プロセス
（更なるRAのﾌﾛﾝﾄﾛｰﾃﾞｨﾝｸﾞ）

昨年度までの安全の番人による重点進化プロセス

SE・開発・見積　｜　受注・設計・制御　｜　加工・組立・電装　｜　運搬・据付・調整

安全健康推進部様・調達部様・生技様に加え　重機作業の業者殿（サンエイ殿）も参加いただきデジタルRA実施。

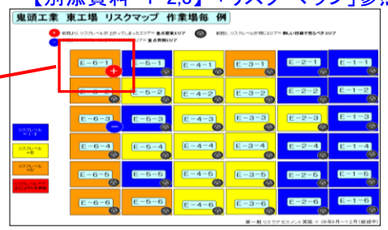
時にはトップ自らも
お客様とのデジタルRAや
エンジニアの教育を実施。

現場も　事前にデジタルRAに参加検討しているので　作業前準備やRAも早く深く。グローバル

2. 場所という軸（社内・社外共）でリスクアセスメントしていく活動。（例）

2-1. **工場内リスクマップの改善による　RAの進化・変化・活動の見える化。**
工場内のすべての場所をRAするために　リスク・マップ上に各自の担当エリアを碁盤の目のように区切って場所の網羅と担当エリアの明確化を実施。
また　短にマップ化や残留リスクの現場表示をするだけでなく　その現場の安全濃度の進化・変化や、職層・役割ごとの活動確認を　継続的に見える化するしくみにした。（やりっぱなしにしないようにするための活動を検討。）

【別添資料　1-2,3】「リスク・マップ」参照。



2-2. 栄豊会の**相互安全点検アドバイス活動**などで　ご指摘ご指導いただいた事項や参加できたおかげで発見できた多くの気付きやヒントを　社内のRAや改善活動に反映。特に社内での場所軸の活動においては　具体的に参考になった物件が多かった。

また　参考にさせていただいた事例は　現場にその参考元等を　表示させていただき、その　お会社のご尽力、**”参考元に敬意をはらう心”の感性教育**も実施した。
各社が　お互いに常識マナーを守る風土づくり　教育をし　こういった相互研鑽的なRAの活動を　有意義な場として継続させるのに”感謝の気持ち”を定着させることが重要であると考えた。　その他　栄豊会だけでなく　異業種勉強会、客先工事の協議会活動、車両系生技部ご指導による安全衛生研修会活動等へも積極的に参加。
それぞれの活動を通して多くの新しいRAに役立つ視点を得ることが出来た。

3. 職層毎の役割という軸で、安全の確からしさを高めていく活動。（例）

3-1. 職層ごとの”役割マップ”の作成。（見える化）

3-2. その職層ごとの役割遂行に必要な能力＝”必要能力・資格マップ”を作成。（見える化）

3-3. その職層ごとの能力・資格取得に必要な教育内容を　　当社の人事制度”自立した人づくり”ポリシーに追加し、　教育計画を企画実施。
また　その必要用件に対しての各自の過去・現在の能力と　その進化度合いを期待値とともに継続評価。

その1事例として・・・　衛生管理者の教育制度

安全衛生管理者の免許取得とその管理活動は一部のスタッフに任されていたが新たに衛生管理者などの安全衛生に関する資格取得を　幹部職層の必要能力として教育・テスト等を実施。人事的なしくみに加えることにより、主観的経験値でのRAから、衛生管理者としての客観的な専門知識・能力を持ってRAできる幹部を育成する制度。
職層ごとの能力→役割がレベルアップすることにより会社全体のRAの能力の進化が　質的にも量（人数）的にも　継続的に向上することをねらう。

まずはトップ層から管理職層全員を対象に衛生管理の勉強会を企画し　自主登録制度にしたところ　延べ148人の教育参加あり。それにより幹部層の80%以上が衛生管理者検定認定。

6. 成　　果

・重点活動目標について①プロセス軸の活動に加え、②場所軸・③職層軸の活動についてそれぞれの教育・リスクアセスメント等への改善項目の企画およびその項目の100%実行ができたこと。　その上に、　幸いにも　災害も0であった。

・この3軸での安全ボックス・ビジョンと　その体制の試行ができただけでなく、その風土づくりの過程において　一時的なリスクアセスメントで終わるのではなく
1. 人づくり（自立的な人材育成とその進化の継続的評価活動）
2. 職場環境づくり（職場の安全活動自身の進化の継続的評価活動）の必要性を感じ、理解し、

7. 反省と今後の進め方

この安全ボックス・ビジョン　の試行はできたが　その箱の中の継続的「安全濃度向上」が　本来の目的であり、そのレベルは　まだまだエントリーレベルである。その箱の中で　当社の従業員たちが　本当に”守られている”と感じられ、その進化を体感しつづけるようにするための更なる具体的アイデアがまだまだ必要。　また　激しいコスト競争前提のグローバル現調化・現地改造工事等への具体的リスクアセスメントや多生技にわたる新技術対応等、　業務環境の変化や難易度が上がる中で安全の確からしさを上げ　実態が伴うように導く経営活動には　さらなるアイデアやビジョンの進化を要すと考えられる。